



川口居留地跡記念碑

同志社 歴史散歩 大阪

楠木 路易

はじめに

主義と立ち 主義と仆れん 我身なり

浪華の夢の 世にしあらねば

明治8年のはじめ、先生は、大阪に宿願の学校を創設しようとした。しかし、周囲の事情から、それは失敗に終り、あわれ一場の夢と化した。冒頭の和歌はその時のことを後

年追想して詠まれたものである。長い歳月の経過すら癒やすことのできなかつたこの悲愴な歌から判断しても、いかに、この大阪の失敗が先生に深い心の痛手を与えたかを知ることができよう。

それで、これから大阪を散歩するにあたり、この明治8年のできごとを中心として、淀川べりから書いていこうと思う。

川口外人居留地の跡

先生は、帰国してのしばらくを、安中の家庭で送られたのち、明治8年1月22日に、海路大阪に上陸された。そして、川口与力町3番にあった宣教師ゴルドンの邸宅を仮りの住居として、阪神地方でキリスト教の伝道に従事しておられた。阪神地方の外人宣教師の多くは、はじめ英語の私塾を開いていたが明治6年2月、切支丹禁制の高札の撤去の頃から、キリスト教の伝道を本格的に開始していた。先生は、その応援のために、はるばるこの地に招かれたのである。

さて、川口とは……。

江戸時代、諸国、諸藩の船は、堂島川に、土佐堀川に、水路も狭しと奔きあっていた。

その頃、川口は船番所のあった、いわば、港の監督場であった。それが幕末から維新にかけ、大阪が開市・開港すると、この川口は、貿易港として生れ変わり、付近は、洋商館や外人の邸宅が軒を列ねる異人街となった。宣教師ゴルドンの邸宅はその中であつたのである。だから、大阪の文明開化の波は、ここから四囲にその波紋を拡げていったし、プロテスタント伝道も、カトリックともども、ここをその中心地としたのである。

記録によれば、明治8年には、外国船は一隻も川口に入港していない。土砂の流入が多く、水深が浅い淀川は、港をつくるにも不適當だったから、貿易港としての繁栄を神戸に奪われたのである。先生は、この状況をどのように看取されたであろうか。

その後、川口は明治15年に廢港となり、外人居留地も、条約改正にもない明治33年にここから消えてしまうのである。そして、今は工場、倉庫の並ぶ雑踏の地となっており、記念碑のみがその名残りをとどめているに過ぎない。

土佐堀川

先生は大阪に來られて間もなく、1月27日に、いわゆる『大阪會議』に出席するため木戸孝允が來阪中である、ということを知られた。大川難波町の鹿島邸に木戸を訪ねて懇談し、学校の創設計画を打ち明け、その支援を乞われた。そののちも、先生は、二度、三度、鹿島邸や筑前橋の尾道屋に、木戸を訪ねられている。

ここで、先生が、木戸を訪ねるため、幾度か往復されたであろう土佐堀川の、当時の姿を想起してみよう。

江戸時代の土佐堀川一帯の地は両替屋が多く、蔵屋敷の多かった堂島川沿岸とともに、『天下の台所』・大阪の心臓部を構成した。幕末から維新にかけ、この心臓部に、蔵屋敷の廃止・株仲間の解散などという征矢が、二本、三本と撃ち込まれ、その鼓動は乱調をきわめた。しかし、それも長くはなかった。没落する老舗に替って、新しく興った商人たちは、この不死身の心臓を再び正調に戻していた。明治8年の土佐堀川は、そうした新しい息吹が、ひしひしと感じられるところであった。そうした空気のなかを往復された先生は、その理想を実現せんとする、不屈の闘志を、

いつそうかき立てられたことであろう。今も、このあたりは、官庁、商社の群立する、大阪の心臓部であることは知らぬ人もない。

磯野と渡辺

木戸孝允が來阪したのは、前述したように『大阪會議』に出席するためである。木戸をはじめ、大久保・板垣・伊藤・井上といった朝野の実力者が集り、明治の新しい政治の方向を決定つけた會議である。先生に支援を乞われた木戸は、この重要な會議のあい間を、先生のために割くことをすこしも厭わなかった。豪商磯野小右衛門に、學校設立の資金として、二万の大金を出すことを約束させ、知事渡辺昇に、學校設立の許可を与えるよう説いた。そして、その結果を先生に伝えて、木戸は東京へ去っていった。しかし、2月の終り、先生が知事にあつたところ、先生の理想とするキリスト教々育が、どうしても知事の承認するところとならず、主義に立つた先生は、

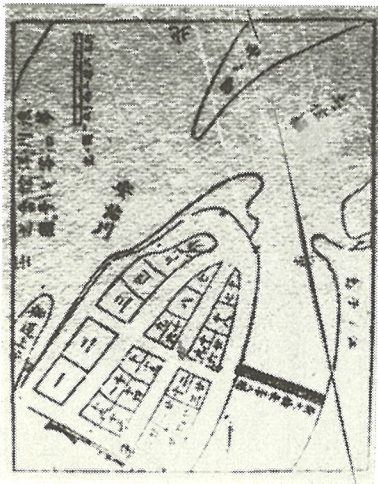
宿願の學校を、大阪に創設することを断念されたのである。磯野の資金も、それ

とともに、むだ花となって散ってしまった。同志社の歴史の上では、不幸な関係者となつた磯野と渡辺も、大阪の歴史の上では忘れられない人物である。

磯野は、木戸と同じく、長州萩の人である。18才の時、下関に出て事業に失敗、ついで大阪に移り、維新の混乱期を巧みに泳ぎ米相場で一躍豪商となつた人である。

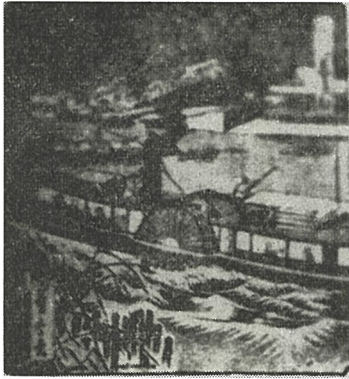
そののちも、磯野は初代堂島米商會所頭取・第6代米穀取引所理事長を歴任しており、藤田伝三郎とともに、大阪財界の長州閥をつくっている。

磯野は、大阪に移つた当座、しばらく、長



州の密偵をやったことがある。その頃、木戸は、桂小五郎として京洛で活躍していたから、両者の関係は、そうしたところからはじまったのではあるまいか。

渡辺昇は大村藩の人。江戸で、学を安井息軒に、剣を斎藤弥九郎に教えられた。木戸とともに、斎藤門下の三羽鳥と謳われた剣士である。渡辺が大府府知事になったのも、木戸の援助に依るところが多い。正知事になったのは、明治11年1月であるから、先生が会われた明治8年は、まだ権知事という位置であったことになる。渡辺知事は、キリスト教々育に反対したが、師の安井息軒も明治のはじめ、反キリスト教主義者として有名であつ



(淀川の河蒸気)

た。とはいえ、渡辺は名知事の一人である。

天満橋と川蒸気

明治8年4月、先生は大阪の失敗によって受けられた傷心の身を駆って、京都で学校創設の交渉をされたが、ついに、同年6月、川蒸気で淀川を溯航、再度、京都に上られ、同志社の設立とともに、ここを永住の地とされたのである。6月8日付、父民治への書簡に、『……一昨日大阪に罷り帰り、昨日蒸気船にて淀川に溯り上京致し、京師に於て……』と書いておられる。そこで、しばらく、当時の川蒸気を中心として、天満橋付近を散歩してみよう。

このあたりは、往時の渡辺の里で、『わたのべや大江の岸に宿りして……』

と、謡曲『船辨慶』にうたわれたところで、渡辺綱の故地である。楠正行が、寒中、淀川に落ちた敵兵を救出したという、渡辺橋……一名大江橋……の古戦場地でもある。(現在、ここに堂島川に、渡辺橋・大江橋がある。奇妙なこと)

この天満橋の西詰が、江戸時代に三十石船の発着場として賑った八軒家である。

『……数も限らぬ家々を、いかに名づけて

八軒家、誰と伏見の下り舟……』と、『心中天網島』で呼ばれたところである。(地名の起りは、八軒の家があつたからといわれる。)

やはり、この八軒家を発着場として、明治2年以来、川蒸気が三十石船に替って、京阪往還の人々にのどかな淀川風景を満喫させてくれた。そして、岡蒸気といわれた汽車が、京阪間を走り出したのが明治10年であるから、先生としては、京都に上るには、この川蒸気を利用されるほかほなかつたわけである。

岡蒸気が走っても、上り6時間の気楽な船旅を喜ぶ人々も多く、その利用者はそう減らなかつた。しかし、明治の終り、やはり天満橋を発着場とする京阪電車が出現すると、川蒸気は急速に衰微し、大正も深まるにつれ、淀川から姿を消してしまった。今は、『双輪の女王』川蒸気も、古老の語り草とはなつた。

その京阪電車も、今年には、淀屋橋まで延長され、天満橋は、江戸時代からのターミナルの性格を失わんとしている。まことに、こうして、語りつづけると『明治は遠くなりけり』という言葉を感じさせられる。

(香里高校教諭・社会)